

おやすみロバ



通巻1号 2007年10月

黄色い花

鳥たちが歌い始める前の、まだ青い時間に
歩きまわる。なぜなら、眠れなかったから。
新しい空気を吸えば少しは醜い考えを洗い流
せる気がしたから。まだ眠っている子供に
そつとくちづけするみたいに、木や草や雲や





虫、家や車や電柱に話しかけたかったから。小川のせせらぎに乗っかって流れていく葉っぱのように何も考えないで。

路面に「急カーブ注意」と書かれたカーブ。あと何時間かすれば大型ダンプカーが何台も強引に通過するけれど、今は静かだし歩く身にはちつとも急ではない。左にカーブして右にカーブしてまた左に折れた先に、大きな山桜の木が一本。そこは砂利を敷いた小さな駐車場で、車は木をとり囲んで縦や横や斜めを向いて止まっている。ネコジャラシやメヒシバが生えていて風にそよいでいる。ヤブガラシやカラスウリのつるが敷地をまたいで隣の庭の木によりかかっている。その庭は雑草たちの越境をおおらかに迎え入れて、こんもり

と茂り、その奥で小さな家は埋もれている。

ここを自転車を通る時はいつも、花の匂いがしている。冬は蟬梅や梅や水仙、春には沈丁花や、それに、あの得体の知れない懐かしい匂い、土の発酵するような、片栗の咲く斜面でかいだのと同じ匂いがある。初夏には夏みかんの花のうっとりする匂い。それとバナナのような甘い匂いの多分カラタネオガタマの花の匂い、ピスタチオの実のようなすてきな花の。今はオシロイバナの匂いがしている。でもどの花も外からは見えない。つつじやむくげや南天や、いろんな木が周りを囲んでいるので、ぼうぼうとして中の様子はわからない。ただ風が運ぶ匂いだけが豊かに咲きにぎわうその内側を伝えてくれる。

その庭から道路の方にニョキツとはみ出して、一本のオオマツヨイグサが灯るように咲いていた。手を伸ばせば届くか届かないくらいの位置にふつくと、月の色をして。十字の形のめしべをまん中にしてまわりを時計の文字盤みたいにおしべがかこんでいる。夜じゅう咲いていて私を待っていてくれた、わけではないだろうけど、嬉しかった。小さな声で、

「マドンナ」

と言った。カサツと鳥か何かが茂みの中で動く音がして恥ずかしかった。

「ジュリアン。」黄色のジュリアン。三十年以上昔のこと。顔を近づけると甘酸っぱい匂

いがした。

小学生の私は、百円玉を掌に握って、雪の残るビシャビシャ道を走っていた。百円は当時の私には高額なお小遣いだったから、どういいうきさつでそれを手にしたのかと思う。なにしろめつたにもええない百円玉で、とびきりのものを買いたい、とドキドキしていたのを覚えている。車が黒いシャーベット状の水をはねあげていく。私は木田銀座商店街、今はもう殆どの店がシャッターをおろしているという、当時はにぎわっていた商店街、果物屋、電器屋、八百屋、散髪屋の前を通り過ぎて吉川の花屋に行った。おとなしいふくらしたお婆さんが、主に仏様用の花を売っていたが、春が近いからおもてにいくつかの花

の鉢植えが並んでいた。黒いビニールの鉢にそれぞれピンクや赤や黄色の小さな花が咲いていて、八十円と札が立ててあった。こんなに素敵なものが八十円だなんて信じられなかった。食べたらなくなってしまうアイスキャンディと大差ないなんて不思議だった。私は黄色のをそつと持ち上げて、

「これ下さい。」

と言った。笑ってしまいそうだった。嬉しくて。

私は宝物を大切に持ち帰り台所の窓のところに置いた。窓をあけると、工場こうばの青いトタン屋根の上の雪が夕日をうけてバラ色だった。ひんやりと雪どけの匂いと湿気を含んだ空気が気持ちよかった。



その頃の私の家は、工場こうばの上にちよこんと台所と居間と寢室がのつかった部分と、工場こうばの奥のもうちよつとちゃんとした家とがあった。ちゃんとした家の方に祖父母がいて、その二階に、一応私の部屋というのがあった。それはちようど、工場こうばの上の台所と、青い屋根を川のようにへだてた向こう岸で、私は机の前に座つては、寒いのに窓を開けて、台所の母が換気のために時々窓を開けるのを待った。ガラガラつと音がきこえると私は喜々として母に手を振り、そして小さなジュリアンの姿を確かめた。

桜草の仲間プリムラ、その中のジュリアンという品種。この花は次から次に蕾が出てきて、よく咲いた。

大人になって、道端にマツヨイグサの仲間の小ぶりな多分アレチマツヨイグサが咲いているのを見かけた時、咲き方は全く違うけど一輪一輪が、花の形や大きさ、そしてハート形の花びら、と、あの時のジュリアンに似ている気がした。鼻を近づけてみたら、ジュリアンと同じ甘酸っぱい匂いがした。イヴニング・プリムローズ。マツヨイグサの仲間の、正確にはどの花のことを指すのかわからないが、英語でこう呼ぶと聞いたことがあったのを思い出した。

その日の夕刻、仕事を終えて自転車であちに向かうのに、マドンナの咲いていた道を通った。マドンナは無かった。ポキリと痛々

しく折りとられていた。きつと、さつき咲いたばかりの新しい花があまりに美しかったので、恋人のところに向かう途中の男が手折って自分のマドンナにささげてしまったのだと思った。オオマツヨイグサは一日花だから、手折ってしまつたら、もう明日は新しい花は咲かないだろう。ひと晩だけの夢だ。

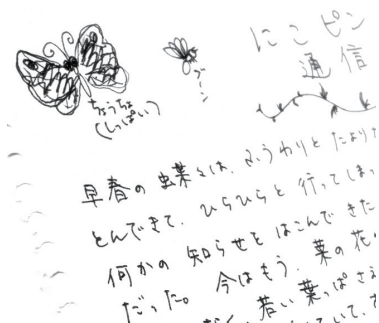
なんて、私の妄想にすぎない。私は悲しかった。

(了)

にこピン通信 1

早春の蝶々は、ふうわりとたよりなくとんできて、ひらひらと行ってしまった。何かの知らせをはこんできたみたいだった。今ほもう、菜の花や雪柳だけでなく、若い葉っぱさえもなまめかしい匂いを発散していて、むせかえるような生命のいぶきで、おそろしくらいです。蝶も2匹して夢中に踊りながら空

高くみえなくなるまでのぼつていく。はかないうような小さい春の方が、もうなつかしくなります。川でいえば上流のような、一日でいうなら朝のような、人間でいえば赤ちゃんのような、そういうものがいとおしいと思います。木々の下をとおると、顔に水滴がぼつりとかかる。きつと樹液がしたたりおちたので



久しぶりに まちに 出ました。 まちと
店が いっぱい あり。 人は お金で、 気に
ものを買う。 案の定 絵本も。 「トランシル
地方の音楽(CD)と絵本」と「田島
のやぎの絵本」と「ろばとやぎと
絵本」。 『茶色の朝』という、フランス
た。 ビンセント・ギャロが 絵をかいた 絵本
(解説の 高橋哲哉の文章が とても
よく 立ちふまできると言えます。)

しよう。まさにこの時期こそ、エロスとは生
命力、躍動のことなのか、と感じさせます。
久しぶりにまちに出ました。まちとは、店
がいっぱいあり、人はお金で、気に入ったも
のを買う。案の定私も、「トランシルバニア
地方の音楽(CD)と絵本」と「田島征三のや
ぎの絵本」と「ろばとやぎと鶏の絵本」、「茶
色の朝」という、フランスで売れた、ビンセ
ント・ギャロが絵をかいた絵本、(解説の高
橋哲哉の文章がとてもいい本)、「須賀敦子
の『こうちゃん』という本」、そのほかいろ
いろ買いたくなった。そして、そのとたん、
物を買ったり捨てたり、買ったり捨てたり、
そんなことばかりしながらしか喜びを味わ
えないなんて情けないじゃないか!と思ひ、

買うのをやめた。なんだかいろんなことみんなが情けなかった。

りんごの花を見に弁天様の手前を左にまがり畑のわきに自転車をとめた。そうして、りんごの木に話しかけた。私はすっかりアホ子ちゃんです。アホ子ちゃんと言いました。

「こんにちは。」りんごの木はだまって笑いました。

「あのー、りんごさんは、うちの近くの西町4丁目の大家さんのうちをとおりすぎて右手の花壇にある、からたちの花のことをご存じですか」

りんごさんは困ったかおをしました。

「からたちさんも白い花びらがひらいて、そのよこから黄緑の葉っぱが出てきたんです。

りんごさんも白いお花がさいて、黄緑の葉っぱとほほをくつつけて、しあわせそう」

りんごさんは「からたちさんはどちらかというとみかんの仲間だから」と言いかけたが、「いや、それは植物学者がそう分類しているだけで、案外、アホ子くんの言っているように、私とからたちは似ているのかもしれない」と思いなおしました。そして目をつむって考えました。

アホ子も目をつむって、さあちゃんとじゅんくんの美しい目のことを考えました。おしまい。

さあちゃんとは保育園の4才児クラスの男の子です。保育園のきまりごとやカンリや

集団生活の中での暗黙のいろいろ、そういうことからみ出してしまふ。だから障害があるのではないかと言われています。障害があるいはわかりませんが、私は、さあちゃんほど美しい野性的な、すてきな子を見たことがないのでさあちゃんが大好きです。さあちゃんも、先生にしかられてもう自分でも何かが何だかわからなくなつて逃げ出してつかまへられて、もがいて泣きさけんでいるとき、私の姿を見つけると、思い切り走つてきて思い切り抱きついてきます。そしてギュッと抱きしめてくる。私もとつてもいとおしくて切なくて抱きしめかえす。何分間かそうしていると涙もかわいて笑顔になつて、また保育園の生活のリズムの中にもどつていきます。

悲しいときさあちゃんの目はとっても悲しく必死に助けを求めている。うれしいときさあちゃんの目はいきいきと喜びを表現している。さあちゃんの場合実にもどかしいことですがことばはさあちゃんの思いをちつとも説明してくれないのです。ことばではうまく表現できないから、体が表現している。それはじゅんくんにもいえることです。

じゅんくん、じゅんくんも、障害があると言われています。同じくらいの年齢（もうすぐ5才）ですが、じゅんくんの方はことばを全く話しません。いやなことはガンとしてこばみ、うけつけません。大人の手をひっぱつてきて、あーしろ、こーしろ、と無言でうつ

ていとい。人間社会。

みえりかもくれない

裸になたり。どろ水

おなかもくわさない)

こたわたり。——

こいな ~~わ~~ ワクを

自然にみえてきます。

もかおも頭も洗わ

いし。今だと。ももひき

工頭(2:50)みたいで。

われ目かいみえり(4:00)

黄色。も下から
まいています。わす
すといさくて あいら
どくたみ女婦人は、ま
いいうかんいで。季節か
深みどりの和服とま
な風情です。そのこ
かうかうか。鳴きま
「かうかう鳴くと雨」
さます。そこで。どくた
「あなだ。アホ子ちゃん
え？」
「かうかうは。鳴き
まえりために。おまへ

たえます。じゅんの目はいつも真剣で、山の奥の湖を思わせるほど静かに悲しみをたたえています。じゅんくんを見ていると、人間社会の中では異常とみえるかもしれないいろいろな行動——すぐ裸になったり、どろ水をのんだり（のんでも平気、おなかもくわさない）わけのわからないことにこたわったり、——も、社会の常識みたいなワクをはずしてみようと、むしろ自然にみえてきます。じゅんくんは大人に体もおも頭も洗わせないのできつたないし、今だと、ももひきいつちよでエガちゃん（江頭2:50）みたいで、しかも、半ケツ（おしりのわれ目がみえるくらい）の状态いがじゅんのももひきのベスト位置みたいで、いつつもセクシーラインに保っているの



にこピニ
通信

[illegible][illegible]

12

けん命何か言いたそうにした。私はその瞬間を息をとめて、待った。だけれど「やつぱりだめだ」というかおをして、じゅんは切ない目をしたまま、ためいきをつき、目をそらした。そして泣いた。そういうわけできあちゃんとしゅんは宝物なのです。

たからもの。たからものというスノードロップやずらんやマルメロや……いえない、そういうものじゃなくて……。ル・クレジオの本や石牟礼道子の本と出会えたこと。満月洞でいっしょに働いたうめちゃん、オリエちゃんたちやマツチ人（じん）、ごまさんなどのかわったお客さん。あびちゃん、はし本さんなど自由にやさしい人と出会えた

こと。介助で、ほんとうにいやな思いもしたけど、それでもつき合いつづけている「障害者」の人たち、ひとりひとり、……などなどあるわけです。そして庭にはえてる雑草きゅうりぐさくんやどくだみ婦人も。

きゅうりぐさくんは小さい小さい水色の花、まん中は黄色、を下から順に咲かせ、先っぽはくるとまいています。わすれな草の間ですが、ずつとずつと小さくてあいらしい。

どくだみ婦人は、まだ咲きませんよ、女は40から、というかんじで、季節がもつと大人になったころ、いい深みどりの和服を着て白いすけるような肌で知的な風情です。そのころになるとここいらへんではかつこうが鳴きます。ここらのかつこうは、よく鳴きます。

「かつこうが鳴くと雨」というけれどそうじゃなくても鳴きます。そこでどくだみ婦人が言いました。

「あなた、アホ子ちゃん、ほんとにアホ子ね。」
えっ？

「かつこうは鳴きたいから鳴くんです。天気
を教えるために鳴くのではありません」

そのとおりです。

アホ子は考えました。鳥たちはどうしてあんなにもプルプルと飛び立ってプリプリとしているのに人間はそうじゃないのだろう。いい人間だつて子供のころはもつとプルプルプリプリしていました。

「さあ、アホ子や。おまえもこのいのちの嵐にまきこまれてとんでゆけ」とどこかで声が

しました。振り返ると生協のふじだなの藤たち
がゆさゆさゆれています。甘い香りがうず
なつてつむじ風となつてアホ子を包みま
す。アホ子のかみは逆立つていまにもとばさ
れそう。かつらの木もアホ子の髪と同じよう
にひきちぎれんばかりです。さつきまで金色
にかがやいていたポプラの葉がなまなましい
匂いでひきちぎれ舞っていきます。

「さようなら」アホ子は心の中でおじぎを
しました。アホ子ちゃんはいきものたちのい
ぶきにまかれてとんでいってしまいました。

おしまい

この冊子について

おやすみロバ



島尾ミホという作家を紹介してくれたのが、鶴峰まや子さんだった。特に「海辺の生と死」という随筆集は、昔飼っていた白い小さな錦花鳥きんからちょうのように、普段は全く意識しないが、年に数度その存在を思い出すことになり、手にとって読み返してしまう。ついには、今年初め、「海辺の生と死」の舞台である奄美諸島のひとつ加計呂麻島を訪ねるまでになった。

ここ数年、その「海辺の生と死」以上に読み返しているのが、鶴峰まや子さん

の書いた「にこピン通信」である。第三号が発行されて以来、次号を催促する僕の声は届かず、久しく時間が過ぎていた。加計呂麻島から帰った直後に、島尾ミホの訃報が届き、僕にとってそれがひとつの契機になったのだと思う。工房水銀堂で、鶴峰まやさんの冊子を発行させて頂くことを思いつき、懇願した。

島尾ミホの新作に触れることは出来なくなったが、こうして、もうひとりの作家がふたたび筆をとることになった。（斉藤俊行）

工房水銀堂からのお知らせ



■ 絵本「かぜフーホッホ」
福音館書店ちいさなかがく
のとも 11月号、(文) 三
宮麻由子、(絵) 斉藤俊行
が10月1日に発売されま
す。お近くの書店でお求め
頂けます。ぜひご覧下さい。

■ 陶房かまなりや9月の
芋乃市場(9/25～9/30)に
参加させて頂くことになり

ました。絵本の原画やポス
トカードを出品します。心
地よい空間で食事でもできま
す。お近くの方は是非。

陶房かまなりや
横浜市保土ヶ谷区新井町 542
<http://www.kamanariya.com>

■ 「おやすみロバ」次号は
12月1日発行予定です。
にこピン通信2を収録予
定です。



おやすみロバ通巻1号

2007年10月1日

著者 鶴峰まや子

挿絵 斉藤俊行

発行 工房水銀堂

水銀堂ホームページ <http://suigin.com>